るまどのむら竹といへる古歌にもよれり。貧學の事なれば、十分にはあらずと雖も、いかにも奇しき行狀の老人なれば、ひとぐ〳〵只管賞讃す。朝より草鞋はき、竹籠の裡に、大根かぶら、牛房にんじん、その外種々野菜のたぐひを入れて、杁もて是をになひ、麻布龍土町、六本木へんまで商にゆく。諸人その行を稱するをもて、何にまれ、這の老人が來るを待ちて、おの〳〵野菜のたぐひを求むるゆゑに、午時をも過さず賣りはて、家に皈る。かへればまた案上に向ひ、書をよむの外、他事なし。後には、門人なども多くいできて、庵中にとひ來るもの、若干なり。麻布六本木に、何がし侯の御隱居、御別邸におはしけるが、村竹が異なる行を聞きこまれ、をり〳〵宣して、おん談話の友とせられけり。是よりいよ〳〵名高くなりぬ。社中の人々、村竹が野菜を擔ひうりありく事を恥ぢて、「是を廢め給へ」と止むれども聽かず。爰に青山より麻布へかよふ處に、足輕町といへるところあり。這は、何がし侯の御官第舍裡なれども、麻布への間道なれば、もろ人助の爲にとて、畫のみ這を通さるゝ事なり。されば、列侯旗本たりとも、這の處を通るゝときは、鎗をふせて通る事なり。一時村竹例のとほり野菜をになひて、麻布邊へ商に行き、午時ごろ賣りはてて、かへりに這の足輕町をとほりけるが、當日六月

杁―天秤棒

旗下―徳川幕府の家臣、知行萬石以下御目見得以上の者

二十四日芝愛宕山四萬六千日とかいへる日にて、參詣人おびたゞし。然ばこの足輕町も、つねよりは往來茂し。殊に大暑にて、いと〳〵熱氣人をむす。村竹菅の小笠をかぶり、杁かたげて皈りける。向のかたより、小濱何がしどのと申すやん事なき御方、供奉士十餘人引きつれ、例の通り鎗をふせて來られける。村竹遙にこれを看著け、この小濱氏は、をり〳〵わが家にも來り給ふ御方なるに、今かく杁かたげ、草鞋はきたる儘にて遇はん事見ぐるし、と思ければ、不計かたはらなる御藩中の門内へにげいり、梅の樹のしげりたる間に隱れ、かゞまり居たり。然るに、這の家のあるじ是を看つけ、大いに怒り、忽ち六尺棒をひき提げとんで出で、「儞何奴なれば、呼内もせず裡にいりて、かく樹の下に屈りをるぞ。察するところ、盜人なるべし。打ち殺さん」と敦圉きつゝ、彼の六尺棒にてうたんとす。村竹おどろき、飛びすさり、「小老は、日毎這のほとりを過り、商ひいたす者にて侍ふ。當今御門前にて知己にあひ、餘り看苦き體にてさふらへば、計らず御門裡へかけ入り隱れさふらひき。萬望は罪をおんゆるし有るべし」と、只管にわび言しけれども、主人一向に聽いれず、猶とび蒐つて打たんとす。村竹今はたまりかねて、杁と籠とを扯拏ながら、門外へかけ出でたり。主人は猶も是をうたんと、追かけて

四萬六千日―當日參詣するものは四萬六千日參詣したる程の功德ありといふ日

敦圉き―息差荒くし

かた衣―武家の禮服、社祢の上ばかりをいふ

門をいづる。むら竹狼狽走らんとする時、かの小濱何がしにはたと往合ひ、かほ看合せける。小濱氏、丹後ひらの袴に、黒絽のかた衣著られ、急に殿中の笠をぬがれ、村竹にむかひ、腰うちかゞめ、「先生這のほどは、たえて御無音にすぎ侍ひき。今日、おん活業もはや御返りに侍ふや。小姓も、歸路にはかならず御菴中へおん訪問まうす心得にて侍ふ」といふ。村竹大地に兩手をつき、言語へりくだりて、何くれと御答へまうしけり。此のとき、村竹を追蒐いでたる這の家のあるじ、六尺棒はふり揚げたれども、今止事なき體の人、叮嚀に接禮せらるゝを看て、流石に手をも下し得ず、ふりあげし棒のてまへ面目なげに看えにけり。途中といひ、大暑なれば、小濱氏も言みじかに接禮をはり、別辭をつげて、東の方へ去られけり。村竹また彼の主人の前に兩手をつき、くれ〴〵と無禮なりし事を詫言す。主人もいま去りし人の、先生と云し詞耳に殘り、是よりは强て怒らず、「這の後よく心得よ」と云ひて、門内へしりぞきたり。村竹衣服の砂うちはらひ、枕擔けてかへらんと做しけるとき、亦一人の男愛宕詣と見えて來かゝり、「先生はやく御しまひなされしよ」と言ひかけて過ぎゆくを、這の家のあるじ、門内より跑いで、彼の男をよびとゞめ、「今其の方のもの云ひたる商人は、何者なるぞ」と問ひければ、男こ

たへて、「彼の老商人は、窓のむら竹と號す、異物にて侍ふ」と云ひて、去り往きけり。「偖は、聞およびし村竹にて有りけるよ」と、這の人大いに嘆息しけり。當日夕ぐれにいたり、主人村竹が家に尋ねゆき、晝のほど無禮なりし事を、只管にわび言しけり。斯て這の人も亦、歌など詠みはじめ、友四五人かたらひて、一册の歌まきを制へ、鮮けき魚一尾をそへて、村竹が方へ添削をこひ越しけり。村竹件一に朱書など加へて、奥に「やつがれ老いて、敷島の道にうとし。萬望は這の後おん歌の撰などは赦し給るべし」と寫著めて、

螢さへ雪さへいまだあつめねば我からくらき窓のむら竹

と詠みそへて返しけり。這の老人實に一畸人にて、千般のをかしき物語あれども、略しぬ。文化のはじめ、八十二歳にて死去す。同處智學院といへる禪寺に葬る。

敷島の道―和歌の道

螢さへ雪さへ云々―車胤、孫康が螢雪の故事

百家琦行傳五之卷　目錄

女夫鍛冶　孝子祿助
猪之助　烟曲彌平
桔梗屋阿園　烈婦阿雪　奴の小萬
峻山和尚　行水政右衛門
有難與一兵衛

百家琦行傳　五之卷

女夫鍛冶

三更、四更―三更は凡夜十二時より二時迄四更は二時より四時迄

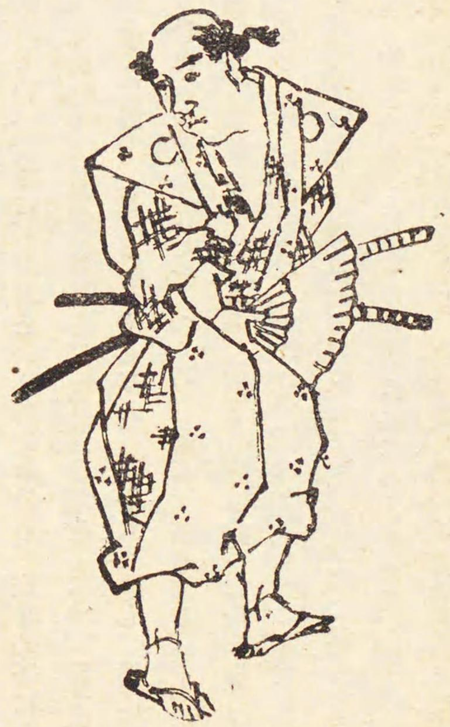
泉州岸和田五軒家町といへる處に、浦田治右衛門といふ、鍛冶職人ありけり。至て叮嚀なる癖あり。這の者兩親と離れて住みけり。毎宵夜業をしまひてより、親の家にゆきて、門うちたゝき、「小僮たゞ今よなべを做果さふらふ。御きげんよくおん安歇あるべし。我們も是より臥し侍ふ」と云ひてかへり、然して夫婦とも臥房にいりぬ。朝また疾おきいでて、親の許にゆき「唯今おき侍ふ。御きげんよく侍や」と云ひて皈り、夫より朝飯を吃し、家業をつとむ。奈何なる風雨たりとも、毎夜毎朝かく事なし。時にふれては、夜業三更四更におよぶ事もあり。然ども、猶行きて、門うちたゝき、例のごとく云ひて皈る親もまた是を聞かざる間は寐ねず。家より家まで、往來わづか二町許にして、いと近くはあれど、數十年が間、一日も廢せし事なく、兩親死後やうやく止む。文化六年九月二十九日、治右衛門八十二歳にて死去す。同處、寺町圓教寺といへる法華寺に葬す。女夫

鍛冶といへる謂いまだしらず、極めて譯ある事なるべし。

孝子祿助

累七の法要―七日目毎に營む佛事

南紀和歌山南阿呂地柳町といへる處に、祿助といふ者ありけり。商客の子にして、父にはやく別れ、老母一人を養へり。性質魯鈍にして、活業の道をしらず。詮方なくて、人家の軒に立ちて、米錢をこひ得て、其の母をやしなふ。孝心太甚厚し。常に、古麻上下の、うへした小紋ちがひたるを著し、竹にてつくり、墨にて塗りたる、鞘木にて作れる、鍔のをかしき兩刀を横たへ、破れたる扇をもち、何とも譯らぬうたを唄ひ、人家の簷端にたちて物を乞ふ。然ども、餘の乞兒などとかはり、何時までも門に佇立む事なく、一こゑ唄ひては、忽ち亦外の家にゆく。御城下の町家にても、渠が親に孝心なるにめでて、祿助が來たるを待ちて、物をとらする事なり。朝にははやく起きて、飯を焚きて母にあたへ、其の躬も飡し、然して、市町をもらひあるき、夕には、早く皈りて、夕餉を制し、老母ひとりを養ひけり。其の後母やまひにかゝり、竟に空しく成りければ、祿助ひたすら歎きかなしみ、葬送など、叮嚀にとりいとなみ、累七の法要も、僧を請じて供養



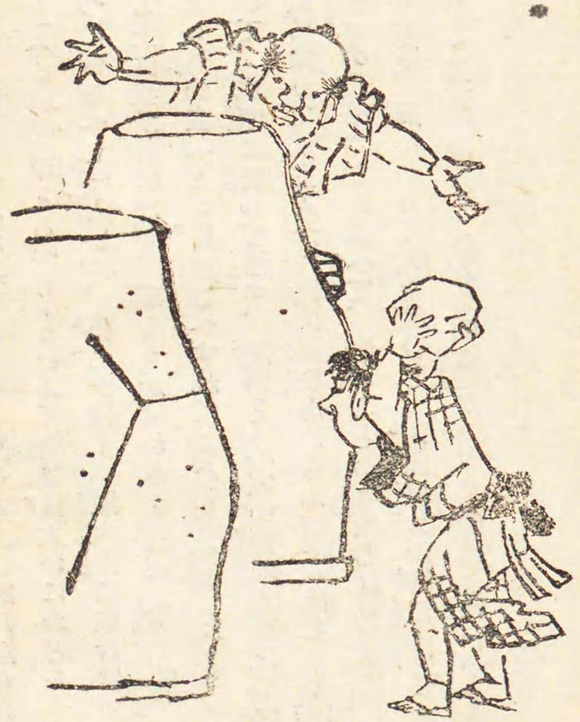
寂光淨土—
極樂淨土

をなし、竟に三年の法事まで、仔細につとめけり。或時祿助、あひ長屋うちの人々に語りて曰く、「それがし、當二十八日には死去いたすべく侍ふ。跡の處よろしく央みまゐらすなり。葬式など、雜費の料は所持いたしたれば、探りいだして御つかひ給るべし」と央みありきけるを、相連家の人々、「また獸子が何事をかいふならん」と、只管わらひて止みにけり。斯て祿助すこしく病つき、其のいひし日に死にけり。衆人大いにおどろき、「這のもの、此の世こそかく淺ましき暮しはしたれ、來世は寂光淨土に生ずるなるべし」と、個々會ひて、家の裡を探し見れば、一箇の筐の中に金三兩あり。外に錢も些しはありけるにぞ、是にて萬般の費用をとりまかなひ、佛事それ〴〵にいとなみ、北阿呂地專念寺といへる寺に葬りけり。

猪之助

安永の頃、江戸尾張町邊にて、裏屋住するいやしき者の子にて、猪のといへるもの在りけり。極めて猪之助と呼びしなるべし。這の猪之年いまだ十歳にたらざる頃、ちかきあたりの、陶器物賣る家のありし、其の納屋のかたはらに、外の童們と俱に遊び居けり。大

いなる水瓶、いくつもふせ置きたる間に、かくれ、あそびして居たるを、陶器家のあるじ是を看て、大いに叱り、「活業のさまたげなり。外へ去て遊ぶべし」と云ければ、這の猪之はなはだ口怜利、「われ爰にあそぶにあらず、我が爺さま、水瓶を買ひて來よと云はれしゆゑ、買ひに來たれり。この水瓶あたひいくらするぞ」と云ひける。主人曰く、「這の小童くちがしこき奴かな。爾が親なんぞ童に水瓶を買ひて來よと云ふべきや。這の水瓶、大人すら一人にては持ちかるぬ物なるに、怎生爾にかひて來よといふべき、謂なし」といへば、猪のが曰く、「いな〳〵我いかなる重きものにても、能く擡ありくなり」といふ。主人聞きて、「爾もし這の水瓶を、一人して家にもて行くならば、價は一箇八錢づつに負けてやるべし」といふ。猪之是を聞きて、「我一人にてもて行くべし。かならず八錢に賣るにちがひなきや」陶器家が曰く、「いくつにても賣るべし。但し、大勢にて運びては、さやうには成らぬなり」猪之が曰く、「何ぞ人をたのまんや、我まづ錢をもて來るべし」と、家に跑かへり、母親に錢八錢もらひ、再般せとものやの店へ來り、「さらば價八錢わたすべし」といひて、主人に與へ、「是より彼の水瓶は我物なり。我一人にて運び行くなり」と云ひつゝ、路上より手頃の大石をひろひ來り、彼の水瓶に打ちつけけれ



ば、瓶はくだけて散亂す。斯て此のわれたる片々を拾ひ集めて、持るゝほどづつ荷ひ、我家にはこびけるが、五六度にしてみな運びをはり、然してまた錢八銅もらひ來り、かの陶器家にあたへて、「今一箇買ひとるべし」といふ。陶器屋大いにおどろき、「爾破ずしてはこばゝ、八錢づつに賣るべし」といふ。猪之が曰く、「爾大人に似合はず比興の事をいふ者かな。買ひとる上は我がものなり。破らうが、わるまいが、爾が預る事にあらず。一人して這の家より外の家へとり除けさへすればよろし。幾箇にても、八錢づつに買ひとるなり」といひて、店頭に居りて搖ず。這のとき、家の前面人おほく立ち集り、いづれも猪之が方を贔屓になりて、主人が言語の過失をわらふ。主人ほと〳〵困じはて、千般といひこしらへ、種々の菓子などあたへて、漸々ことわり皈しけり。抑這の猪之奈何なる者の子なるや知らず。瓶をわりて人を救ひし、司馬溫公が智仁ほどには有らずといへども、然れども、これ淸潔こゝろもちの童なり。其の後またいかゞ成りけんしらず。

比興―卑怯

司馬溫公―名は光、宋代、仁宗神宗に仕へて遂に宰相となる。資治通鑑等の著あり

烟曲彌平

寛政のころ、備前の國の人のよしにて、俗稱彌平といふ者、諸國をありき、煙草のけぶりにて、千般の姿繪をふきいだして、人に看せける者ありけり。其のころ、齡は五十ばかりと覺えたりし。大いなる火皿の煙管に、煙草おほくつぎこみ、烟おほく吸ひこみて、口より萬般のかたちを吹きいだす。予當時は眼病にて、さらに物を看ることあたはず。然れども、奇しき物なりとて、衆人の云ふに任せて、我家にもよびて、是を吹かせて、疼き眼をこらへおしひらき　强て是を看たり。其のふきたる圖、數おほくて、件一にしるしがたし。或は雲龍、柳にけまり、長さ二間の鎖をふき、二ツ輪ちがひ、三輪違ひ梅鉢北斗□くり　猴傾城、こむ僧、ふじの山、いろはにほへとの文字など、百般吹きわけし、其の中に、雲のかけはしといひて、小き輪にて、そり橋を吹きいだして、一個の仙人、その橋をわたりて、空中へのぼり行くなど、おもしろかりし。

北斗云々―北斗七星、その次の字缺く

桔梗屋お園

安永の頃東海道藤澤宿に、桔梗屋といへる邸家あり、爰に園といへる婢女ありけり。同國一の宮といへる處の農夫の子也。生質蕎麥切をこのみて、食する事おびたゞし。徒

丹波の栗くひ―徒然草には「因幡國に何の入道とかやいふ者の娘」とあり

然草に見えたる、丹波の栗くひ娘の如くなり。米の飯、麥飯などは嫌ひて飡はず。唯蕎麥をもつて常の食とす。且蕎麥切を制する事上手にして、奇妙なり。かゝる異物なれば、緣うすくて、夫なし。十八歳の春より、風と此の桔梗屋へ給事に來りけるが、爰に相撲の國大山の石尊とて、大己貴の命を祭りたる山あり。六月の始より七月の末までは、參詣の人おびたゞしく、殊に江戸人おほく登山しけるにぞ、道中の邸家も大いに繁昌して、賑はしかりける。いつしか、這の園が蕎麥を上手に制する事名高くなりて、江戸人おほく這の家にやどり、園に蕎麥を制へさせて飡ひける事流行けり。園又蕎麥をしひすゝむる事上手にて、客人一椀くひ終るとき園はるか這方より、また一椀の蕎麥を投げこみける。其の蕎麥切、あやまたず旅人のまへなる椀の中へ落入ること、奇妙なり。十人二十人の客にても、蕎麥を強侑むるもの、園たゞ一人にて、四方八方の客人のひかへたる椀の中へ投いるゝに、一つとして把外し、ほかに落つる事なく、悉く椀の中に入りて、いさゝかも疊の上などへ溢るゝ事なし。よく鍛練したる者なり。たゞし園にかぎらず、相撲の國は、殊に蕎麥を好む風俗にて、いづれの鄕里の女にても、よく蕎麥きりを客の椀中へなげいるゝ事を上手にす。別て這の園は殊に上手にて、然も蕎麥を制す

柳淇園—柳澤淇園

るに、大いに味よろしく、江戸も又、他國にまさりて蕎麥を好むところなれば、這の桔梗屋の園が事を聞きつたへ、故意たづねて、這の家にとまり、蕎麥を制せて、夕餉の代となし、園が給事にて、投げこまるゝを面白がりて、おの〳〵競ひて、桔梗屋へやどりけるにぞ、太甚はんじやうして、外々の歇家一人も客なきときも、這の桔梗屋は五十人六十人も止宿客ありしとぞ。邸家のあるじも、這の園を家の福鼠と稱して、よろづ心を用ひて使ひけり。斯の如く繁昌する事八九年、いつしか這の家の妻妬忌する事おこりて、園にいとまをつかはしけり。是より後旅人の宿止も些くなりて、不繁昌となりけるにぞ、再般在郷をさがして、蕎麥を上巧に制し、上手になげ入れて給事する女を抱へけれども、一向嚮のごとくは流行ざりし。

烈婦阿雪　奴の小萬

阿雪は、大阪長堀平野屋何がしが娘にして、幼年より、茂左衛門町木津屋仁右衛門養女となる。幼稚より、書畫を好むにより、柳淇園を師として學しむ。雪元來怜利にして、一を聞いて萬をさとるの才あり。十二三にて、書畫および詩歌をよくす。父家富

めるにまかせ、萬般の藝を學ばしむれば、管絃の道もつとも暗からず。幼きとき母に別れ、十五歳のとき父死去す。親族つどひて、家督の事あらそひあり。雪は是をうるさく思ひ、家をつぐ事を斷り、龜、嵒といへる、二人の婢女をともなひ、或ときは實家に遊び、或ときは養家に住居す。雪性質力強く、二人の婢女また勇氣あり。月にうかれ、花にあそぶのときも、管ず這の二女を倡へり。一年四天王寺彼岸會に詣でけるに、蛇坂といへる處にて、兇兒二三人來り、雪が釵簪を偸らんとす。雪この兇兒們をとらへて、右左へ投退けたり。再般起き來るを、また把つて投著けけり。龜、嵒の二女、ともに助けて働きけるにぞ、兇兒們大いに怕れ、はふ〳〵逃げて去方をしらず。是を看る往來の人々おどろき感じ、「そも〳〵何人の娘兒なりや」と問ふ中に、よく知りたる人ありて、「木津屋がむすめ雪といへるものなり」と、傳へけるにぞ、是より雪が勇猛なる事を、專ら世にしられけり。當時道頓堀の歌妓に、尺八をよく籟きける女あり。今名を忘たり年は三十に近かりしかど、太若やかに裝ひ、髪は奴髷といへるものに結ひなし、腰にかの尺八笛を挾してありきけるを、衆人興ある事に云ひもてはやしけり。近來難波新地より出し楠といへる藝子と時混ずべかちずかれはまた別ものなり節、戲場作者、この妓兒とかの雪と、二人を一人として、奴の小萬といふ力強き女の事

四天王寺―大阪、天台宗

をのべて、女尺八出入の湊といへる狂言をとり組み、道頓堀市川座の芝居にて興行す。當年寛延元戊辰の八月なり。雪が事を小萬と名を負せしは、雪が實母を萬といひけり、其の子なれば、小萬としたる成るべし。また源平布引の瀧に、小萬といふ力強き女あり。是等にならひて、小萬と名づけたりと覺ゆ。さて彼の戲場の招牌、小萬がすがた奴髷にゆひ、腰に尺八をさしたる繪の上に、雪が自贊を乞ひけり。雪もをかしとは思ひけれども、止む事を得ず、詩一首自筆にしたゝめけり。

眼前不受綺羅紅。
憂憤由來除國賊。
何願後身住上空。
千生萬古護皇宮。

是は、戲場の趣向によりての作と見えたり。當年雪二十歳の時なり。次の年より、雪皇都にのぼり、緣をもとめて、禁内にみやづかへす。詩歌管絃にたくみなるをもて、女伴に妬まる。五年を經て、仕を辭して、また浪花にかへり、竟に薙髪して、正慶尼と稱す。義父仁ゑもん、氏を三好とよび、長慶の後孫なるが故に、三好正慶尼と號して、四天王寺のかたはら、月江寺に住する事多年なり。正慶は一向門徒なれども、禪法をこのみて、這の寺に居れり。本寺より、慣りとどめ來りけれども、敢て從はず。一年月江寺本尊開

女伴―女づれ

孟蘭盆―七月十五日手向け―獻げ

極月―十二月、歳果つ月の義といふ　かたたがへ

扉ありて、參詣の人おびたゞし。夕暮におよびて、急に大雨ふりいでて、許多の人、大いに難爲し、かしこの簷端こゝの樹蔭にたゝずみて、晴間を待つといへども、雨さらに止まず。正慶急におほくの人を雇ひて、長町にはしらせ、傘數百本買ひきたらせ、衆人にこれを與へて皈せけり。孟蘭盆のころには、千種の花、竹筒をおほく買ひもとめ、龜、嵒と俱に是をたづさへ、諸處の墓處をたづね、跡とふ人なき塚毎に、人しらず花を手向けてありきけり。其の後また月江寺をひきとり、難波村に閑居す。やうやくにして、年老いぬ。一箇の棺を造りて、居室のかたはらに正しおき、日毎客を會して、酒を喫ましむ。文化元甲子年七十六歳にて終りぬ。菩提寺木津村幽泉寺に、雪龜嵒と三字をゑりたる碑ありしを、奈何かしけん、今はなし。這の事實東都瀧澤氏の話と、浪花江戸堀木屋何がしの藏書を校正して、爰にしるす。正慶苅屋何がしが家にありしときの文章あり。

ことし、亥の極月は、おもふよしありて、難波の苅屋何がしの許にかたたがへして、新年を迎へんとてまかりたりけるに、二十七八日より病にふし、二十九日は大いに惱みければ、繁子かいはう何くれとおろそかならねど、苦しさ堪へがたし。やが

—新年を迎ふに方角を忌み前夜他家に宿すること
寅ひとつふたつばかり—夜明四時半か五時頃
ふりさけ見る—振仰ぎて遠望する

て暮はてて、その夜も寅ひとつふたつばかりにや、雑煮などものせよと、さまざまいはひすゝめられけれど、ものも喰ひがたく、いとなやましうて、頓て身まかりもやすらん、あるじのおもふよしも、びんなくやさしけれど、せんかたなくて觀念するうち、鐘の音、とりの聲など聞えて、はやあらたまのとし立ちかへりぬるさまなれど、かゝる身なれば、

とり鐘のこゑもをしまぬ年の丈

曉の寒けさも、よひのなやみにいと身にしむ、苦しさをたへしのびつゝ、ぬるとはなしに、かぎりなき廣野にいでて、はるゞゝと見わたせば、今まで惱みたるこゝろぐるしさも打ち忘れければ、さてはうれしくも死にけるにや、かくては、いづち往くべきと、おもひまどふうち、わらはべどもの、ものいひさわぐこゑ、をかしく聞えければ、いかなるにかとふりさけ見るに、東の窓より、きらゝゝと朝日のさし入りけるを見て、はじめて夢のさめたる事を覺えて、死にはてぬ身の本意なさいはんかたなし。

未來かとおもふやなにはのはつ日かげ

命終—死
宿業のつみ—前世になしたる惡事の報
追福—追善、死者の年回などの供養
伶人—樂師

命終をのみ念じ奉る老が身に、すてはどかりて、七十餘六のよはひつもれる、つたなき宿業のつみ、あさからぬ娑婆の因緣にやと、かぎりなくかなしがる。

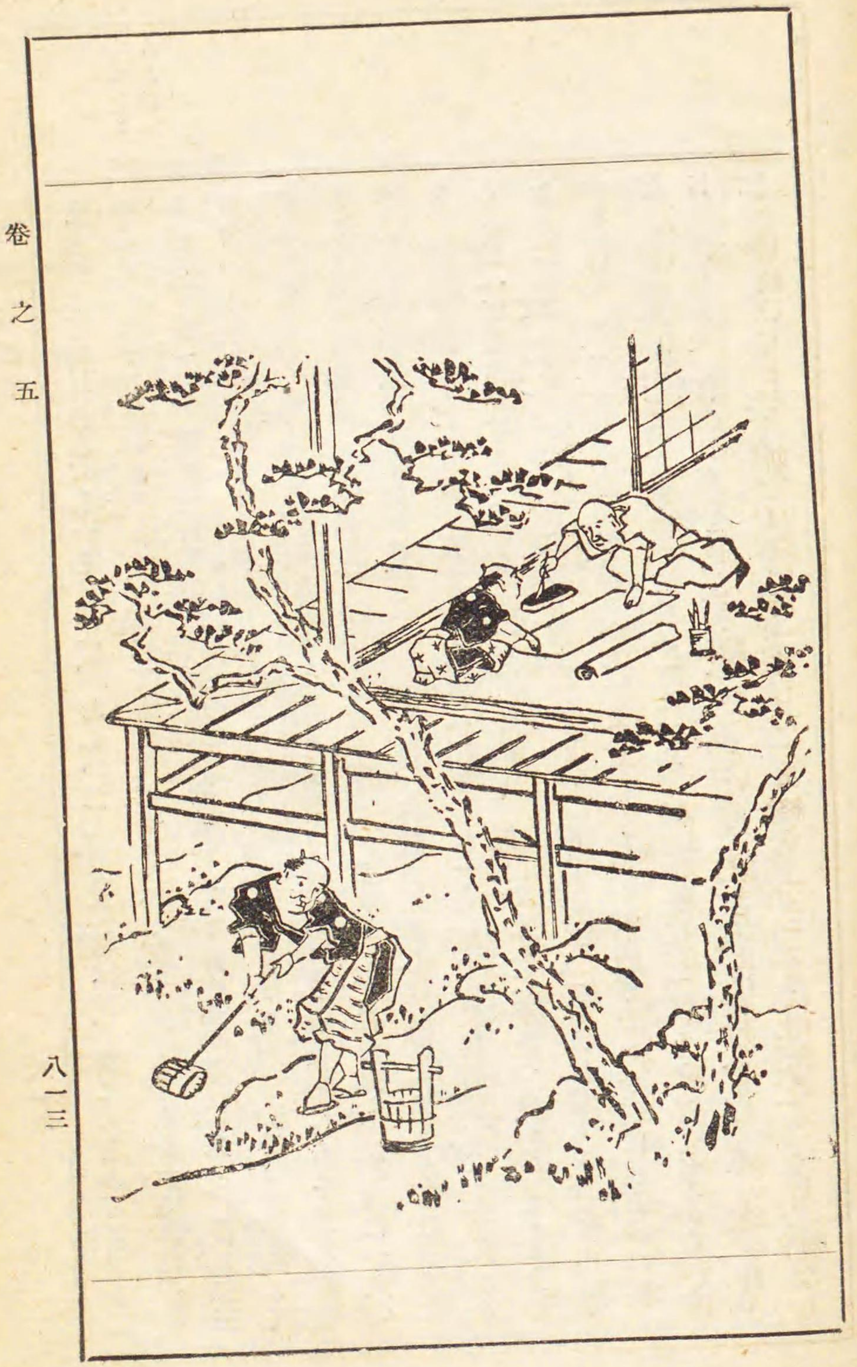
うしや世にまたながらへて何かせんおのが身ながら我ぞはづかし

子　正　月　　行年七十六　　三好氏老婆正慶愼白

浪花楊棗蘆主人の藏書より寫す。都て、奴の小萬男ぎらひといふ說は、戲場にてつくり設けし事なり。雪は、夫に見えし事兩三度あるなり。唯心ざまの雄々しきと、詩歌管絃の道にまで、丈たるをもて、異なりとす。實母楠公正成の後胤なりとて、雪も常に菊水の紋を著けたる衣服を用ひけり。天王寺にて、楠公の年回法要をつとめ、或は、難波の瑞龍寺にて、關白秀次公の二百回の追福をいとなみなどしけり。都て、往古の人の追福をいとなむ事など、好しとしけるとぞ。其の事毎に、若干黃白をなげ打ち、許多の僧を供養し、伶人を迎へ樂を奏しなどしけるにぞ、竟には家產大いに衰へたりしとぞ、人の云ける。

峻山和尙

峻山は、阿州三好郡、農夫、來代禎左衛門といへる者の子なり。幼稚ときより出家して、河内の國、高枝高貴寺の慈雲比丘の弟子になりて、學文す。後また、高野山新別處圓通寺密門子に律をうけ、阿刕にかへりて、德島勢見に住す。寺號今忘たり 后隱居して、同國南方日和佐藥王寺に閑居す、博識にして詩をよくし、最能筆なり。別號閑々子、また換水和尚とも云へり。常に、手水鉢泉水などの水を換ふることを好み、遊人來る毎に、手つだはせて、水をかふる事なり。今換へし水を、外人來れば、亦換へさする、敢て、潔癖といふにはあらず。唯汲みおきの水をきらふと見えたり。されば、一紙書を需むる者は、一瓶の水を汲むべしと書いて、門にはり置きけり。這の和尚さらに諂ふ事をしらず。はじめ、勢見に閑居のとき、いと止事なき君、峻山が菴を訪ひ給ひ 一紙書を乞ひ給ひければ、峻山領承て、やがて硯をいだし、「萬望墨をすりて給るべし」と云ひて、指出しける。君詮方なくて、硯ひきよせ、墨すり給ひける。隨後の士衆おどろきすゝみ出でて、是を摺りけり。峻山渡帋をひらき、筆をとりて書かんとするとき、窗より風の吹き入れければ、「何とぞ、そちらを押へて給れ」といふ。君また止む事を得ず、紙の端をおさへて居給ひしとぞ。斯て自作の詩一首したゝめ終り、「そこらに印匣あるべし、何なり



ものしーふ
るまひ

とも押して御持あるべし」と云ひて、おしいだし置きて構はず。別にもとめて斯するにあらず。たゞ貴賤の差別なく、誰にても皆同じやうに、心隈なくものしかたらふにぞ有りける。亦一日、同國三好郡中西村高尾又兵衛といふ人、峻山の菴に來り、渡紙二三枚書いてもらひ、やがて懷裡より紙につゝみたる物をいだし、「是は、いさゝか酬謝にて侍ふ」といひて出しける。（此紙につつみし物は此國の銀札なりすべて此國金銀をつつむ事はまれなり大かた銀札にてもくる事つねなり）峻山手にもとらず、「斯樣なるうるさき物は、止めにして下され」と云ひて、筆の軸にてはね返し、亦外に一人の客あり、其の人の渡紙をかき居たり。又兵衛、再般さし出しければ、「偖もうるさき男なり。然ほど謝がしたくば、泉水の水を換へて下され」といふ。又兵衛詮方なく、泉水をくみ換へて居たりける。然るに亦一人の男來り、峻山のまへに手をつき、「過日さし上げおきたる墨の價、いたゞきに參り侍ふ」といふ。峻山聞きて、「けふは價もち合さず、后の日來れ。本寺より取りよせ置くべし」といひけるを、彼のをとこ「小僕は遠方なれば、願くは唯今いたゞきて皈りたく侍ふ」といふ。峻山聞きて、「偖もうるさき男かな。今日一錢もなし、再の日來れといふなり。乍然それほどに云はば遣すべし」と、身邊看まはせども何もなし。頓て彼の又兵衛をよびて、「足下嚮のものを下され」と云はれけり。

又兵衛をかしけれども笑ひを忍び、懷裡より嚮の銀札の一封を把りいだし、峻山のまへに置きければ、峻山これを封のまゝ彼の男に投げ與へ、亦渡紙をしたゝめ居たり。墨屋の男その包を受けとり、外面の方へ出去りしが、やがて亦皈り來り、「墨の價は六もん目にて侍ふ。是は十もんめあり、餘分にさふらへば、御返しまうし度く侍ふ」といふ。峻山聞て、「さても千般の事をいふうるさき男かな。何事も節季の事にして吳よ」とて、看向もやらず、書き居たり。墨屋の男わらひながら、銀札四枚ぬき出し、案の上に置きて去きけり。跡にて、又兵衛机上に銀札ありて看苦ければ、紙に包みて、大いなる筆筒の中へさし入れおき、少時ありて、又兵衛は皈りけり。然して、五十日餘り過て、又兵衛ふたゝび扇面に書を願はんとて、峻山の庵を訪ひたるに、當日峻山案上にもたれ、詩を賦りて居たりたる。又兵衛案の上を見るに、嚮の頃筆筒の中へさし入れおきたる銀札の紙包、その儘埃まぶれになりて有りけるにぞ、峻山のものにかゝづらはぬ氣性を、ひたすら感じ、尊みけり。這の一條則ち高尾又兵衛予に語れり。今猶同國南方中殿藥王寺松林中に、峻山の墓あり。天如道人大和尚墓と記し、碑文は撫養の祥藥子是を作る。名文のよしなれども、小姓いまだ是を看ず。

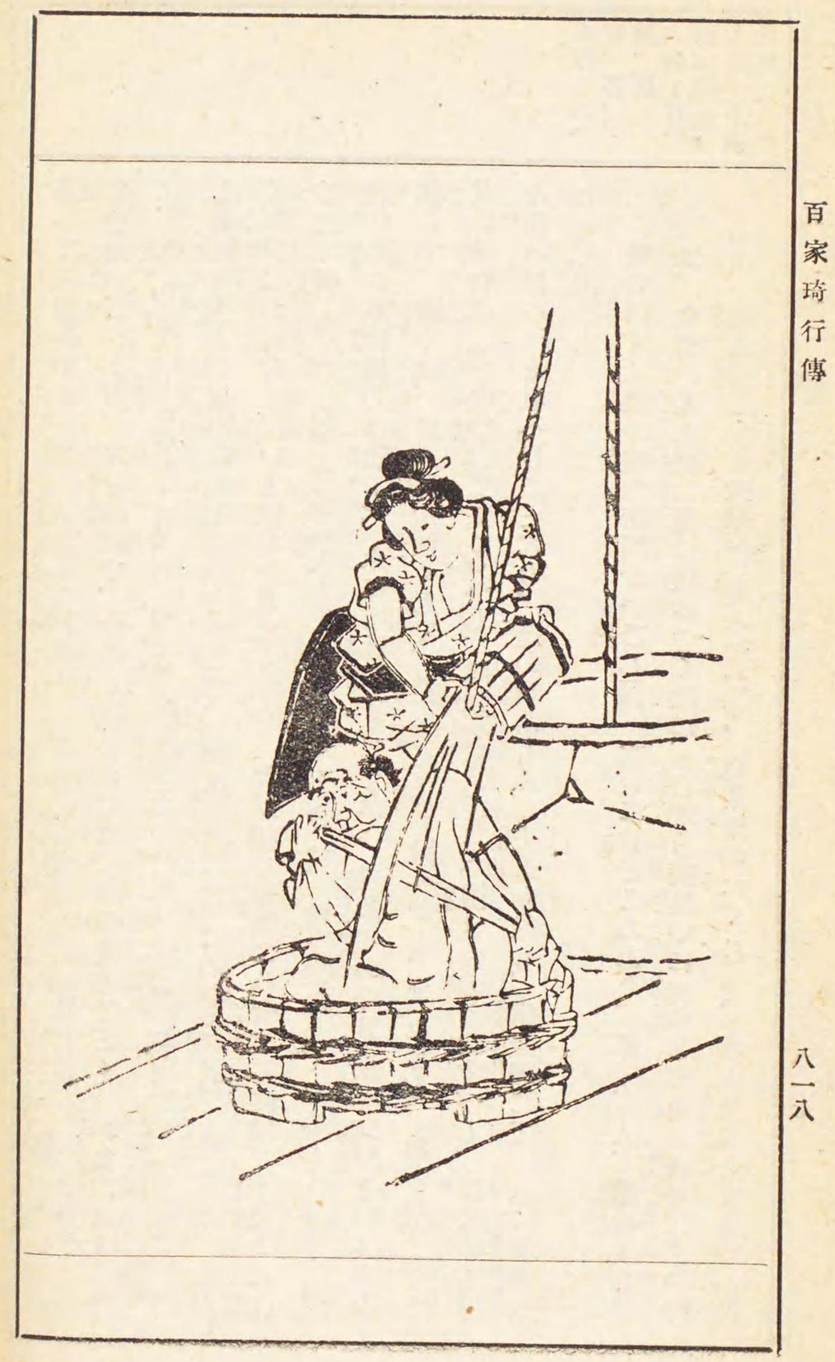
行水政右衛門

寶暦明和のころ、武藏の國豐島郡代々木村といへる處に、行水政右衛門といふ者ありけり。農家にして、身上大いに富めり。這の政ゑもん、壯年より、暑寒とも冷水にて行水することをこのむ。夏の夕、湯を以て身をあらひ、汗を流し去る事、世間みな同じ夏なり。ひとり這の政ゑもんは、水をもつて身を洗ふ事をす。夏にかぎらず、冬極寒の時といへども、盤に汲ませ行水しける。亦食事も、熱きものを飡はず、皆悉く冷物を食す。飯、汁、野菜のたぐひも、一端は焚せて、しばらく寒しおき、冷たる時にいたりて飡しける。其の外、何にまれ熱きものを飡たる事なし。寒中風雪などの日、他へ行きて皈れば、忽ち井の水を汲せて、背より五六度あみ、夫より躬をぬぐひて家に入りて坐し、少時ありて、「ヤレ〳〵大いに溫まりし」と云ひけるとなり。予が父這の事を聞き、わざ〳〵尋ねいたり、政ゑもんに出會して、談話せしに、當の時齡百六歲なれども、齒一枚もぬけず、髮も白髮わづかにまじり、いたりて色白く、元來躬達者にて、當日庭上に薪を破りて居たりしとなり。「奈何なれば然やうに冷物のみ好み給ふぞ」と問ふに、政ゑもん

五臟—心、肝、腎、肺、脾
六腑—胃、膽、膀胱、大腸、小腸
三焦

答へてて云ふやう「都て人壽百歲とて、百までは生きらるゝ物なるを、世間の人、みな色食の二ツより、命を縮めて、はやく死ぬるなり。今の世のごとく熱食のみする時は、忽ち氣の上る病おこりて、頭上熱く下冷えわたりて、死骸にひとし。是則ち、下より死支度する初めなりとは知らずして、愈〳〵色食の二ツに心をとられ、終には、はやく冥府におもむく。いと歎しき事ならずや。我が如く冷物のみ食する時は、下熱かに上冷えて壽永し。亦熱き湯に入りて沐浴するときは、總身血のめぐりあしくなるなり。我壯年より冷物のみ飡し、水にて沐浴するをもて、百餘年の今日まで、病といふ事を知らず。願くは、世人我が如くして、長壽を保ち給へかし。然れども、おのれが如く、眞の冷物は、迚も飡しがたかるべし。唯熱食をやめて、溫きものを食すべし。湯もぬるきを浴み給へ」と敎へけるとなり。這の政ゑもん、夫より後も、猶無病にて、久く存命せりとぞ聞きし。

輯者曰く、此の政右衛門がいひし詞、大いに依どころあり。都て、人、熱食する時は、食物の毒五臟六腑に染みつく故に、自から病腹中に生ずるなり。冷食する時は、毒あるものも五臟に染みつかず。角象牙のたぐひを、赤く染んとする時、煎



五行―支那の理學にいふ五元素木火土金水

じ蘇枋冷して染めては幾たび塗りても色つかず。熱く湧して染むる時は、角の如き堅き物すら、よく染めつくなり。爰をもて、熱食の毒、腹中に染みつくを悟るべし。然ば、藥も熱くして、腹せば能きく道理なり。熱食すれば、齒の赤くなるをもて、身中骨など色著く事知るべし。寒中熱き物を食すれば、當時は凌ぐやうなれども、少時すれば、忽ち寒さをおほふ。寒しとて巨燵に入れば、出でて後さぶさ初めに勝るなり。寒中外面を跑りありく活業の人は、自ら無病なり。亦好んで熱酒を呑む人あり。鼻の先、頬げた赤くなりて、看苦き物なり。また柘榴鼻といふ物になるも、熱酒のわざなり。たとひ夫らの事なくとも、腹中に病を生ずる事疑ひなし。鳥獸のたぐひは、常に冷食すれば病なし。熱食さすれば、是等も病おこるを看るべし。鳥獸齒をみがきし事なけれども、冷食すれば齒の色白し。湯も常に熱きを浴みれば、血氣めぐりあしくなるといへるも理なり。常に熱き湯を好む人、多く中風の病を生ず。別て東都は熱き浴室を好んで入る故に、東都には中風病の人多し。政右衛門が如く、水の浴室には入りがたかるべし。奈何にも溫き湯に入るこそよけれ。政ゐもん常に云し事あり、「凡世界に水ほど尊き物はなし」と、實に其の如し。五行は一ッ虧け

介子推―文公が諸國を流浪せし時に隨從せし忠臣

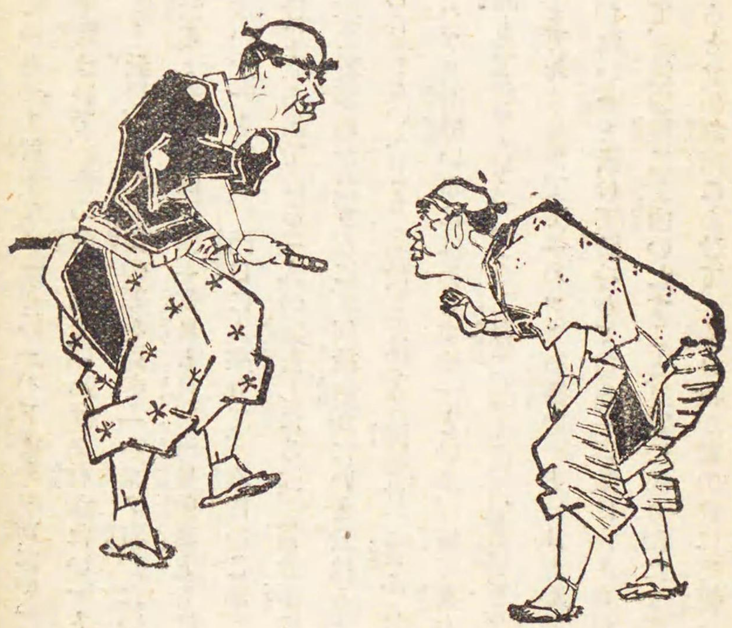
心學―道話、神儒佛を調和し下層社會に知足安分を説く一派の敎、開祖石田梅巖

ても叶はぬ物なれども、其の中水を以て五行の長とするなり。木火土金の類は、三日五日なしとても、命は繼るゝ物なり。晉の文公過ちて介子推を燒殺せしとき、火は賢人を失ふものなりとて、恨みて國中に火を斷つ事一百五日と云り。水を一日停止せられなば、天下の人民悉く死におよぶべし。然れば、水ほど尊きものはなしとは、理なる事なり。

有難與一兵衞

天明寛政のころ、備前の國邑久郡富岡村に、油屋與一兵衞といふ者ありけり。氏は小山、名は壽信、農家にして大いに富めり。岡山の士松島省内といへる人の弟子になりて、心學を專ら尊み、月毎五六度づつ席を設けて、松島大人を請待し、近村の人々を勸めて道話を聞しめ、善道に導く事おこたらず。過不行跡の人を看る時は、自親其の家に行きてまねき來り、くさ〳〵と敎諭し、善心にふくさしむる。一年中國中を跑りありき、人をして心學をすゝめ、其の躬は若干の物を費し、會席を構へおきて、專ら善道にひき入るゝ夏をのみ樂となしけるにぞ、終には國廳に達し、國の守より、褒賞を給はりし事三度

におよぶ。這の與一兵衞にひとつの癖あり。常に「ハツァありがたい」と云ふ事、日に幾百度とかぞふ。朝とく起きいで、母の顏を看て、「ハツァ有がたい」といひ、亦妻の顏を看て「ハツァ有難い」と云ひ、また兄弟の顏を見て「ハツァ有がたい」といふ。「何ゆゑ然樣にありがたいと云るゝや」と問へば、「當日も且、母兄弟妻ともに恙なき顏を見る。ハツァ有難い事ではないか」と答ふ。門口に人來りて、案内をこふ。與一兵衞聞つけ、「ハツァ有難い」と云ひて立ち出でける。「人の案内したるは、善き事にて來りしや、また凶き事にや、いまだ其の幹事わかたざるに、何故有がたいと云はるゝぞ」と問へば、「來し人の、幹の善惡はしらずといへども、我いちはやく聞つけて答ふるほどに、耳も敏く、躬も達者なれば、ハツァ有難い事にはあらずや」といふ。斯て來りし人、さまざまの物語して在りける間も、をり〳〵「ハツァ有難い」といふ事數をしらず。其の人別れて皈るときも、簷端までおくり出でて「ハツァ有難い」といふ。亦途中にて、人に遭しときも、「ハツァありがたい」と云ひて腰をかゞむる。「何故に　ありがたきぞ」と問へば、「儞も我も恙なくて、這の樣に對面いたすこと、寔にありがたき事ならずや」といふ。一日外より皈り來るとき、急雨にあひて、跑り我が家の前にて轉まろび、膝をす



り破り、血の流るゝを看て、「ハツァ有がたい」といふ。下僕是を助けおこし、「斯のやうに疵を蒙り給ひ、何ぞあり難き事のあらん」と細語ければ、「われ轉けて塞となりたればとて、我が麁忽せん方なきを、斯いさゝかの疵にて事濟みし、ハツァ有がたき事ならずや」といふ。亦一時近邊の馬一疋、ものに狂ひて走り來る。與一兵衛是をしらず、行當りて踏倒され、這々おき上りて、「ハツァ有難い」といふ。「何がありがたきぞ」と問へば、「馬に踏殺されても詮方なし。かやうに恙なきは、ハツァ有難き事なり」といふ。何によらず「ハツァありがたい」と云ふ事、口癖にて止む時なし。爰をもつて、世人綽號して、有難與一兵衛と、近國近郷隱れなく、太甚名高きものとなれり。一時、近村の產神祭祀にまうでたるが、奈何しけん、不計往來の人に行當り、頭うち合せける。與一兵衛何も云はず、「ハツァ有がたい」と云ひて去過んとす。向の人大いに怒り、「人に行當りて、詫言もせず、有難いと云ひて嘲弄にする。爾は且那里の者なるぞ。其の儘にすて置きがたし」と敦圉あらく云ひたれば、與一兵衛大いにおどろき、こし打ちかゞめ、「賤老うまれつきにて、有難いと申す事常に云ひいで侍ふ。唯今の無禮は、いくへにも御免し給るべし。小老は這の隣村にて、與一兵衛とまうす者にて侍ふ」と云ひければ、向の人是を聞

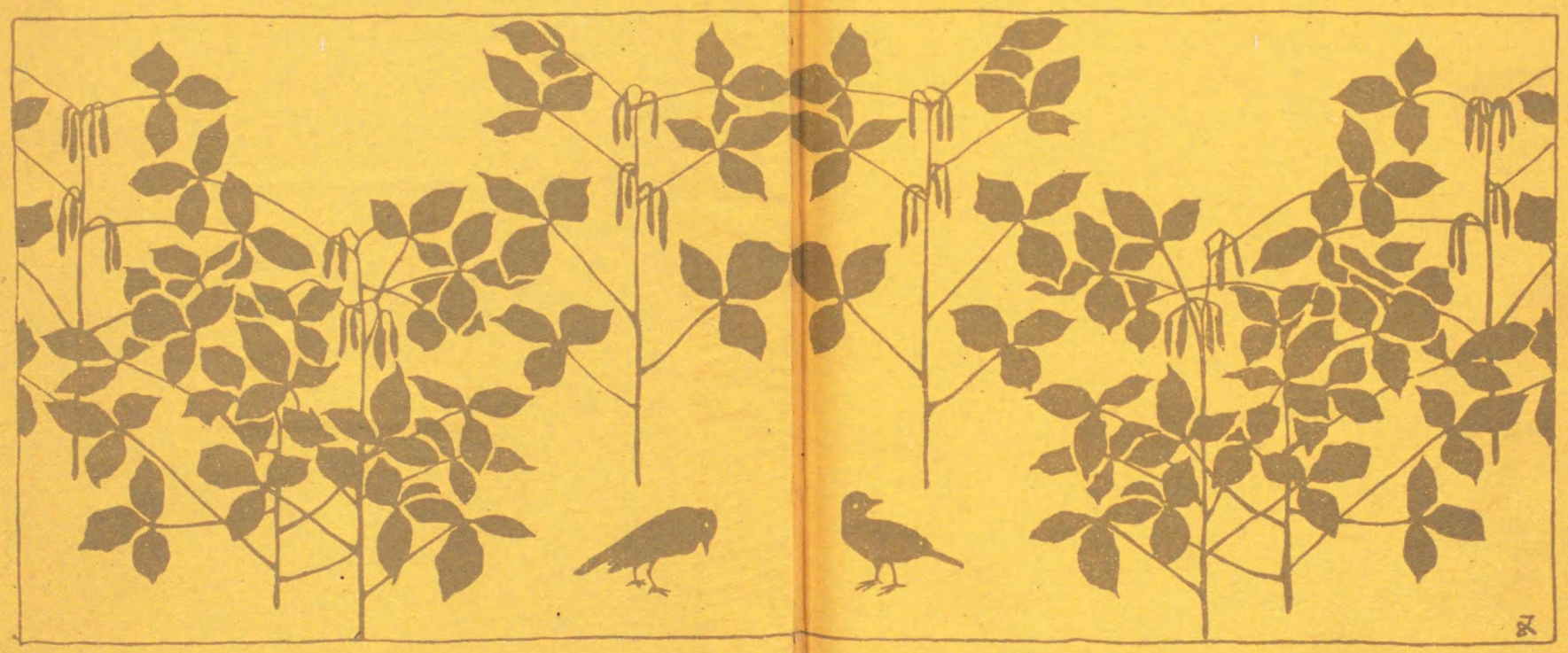
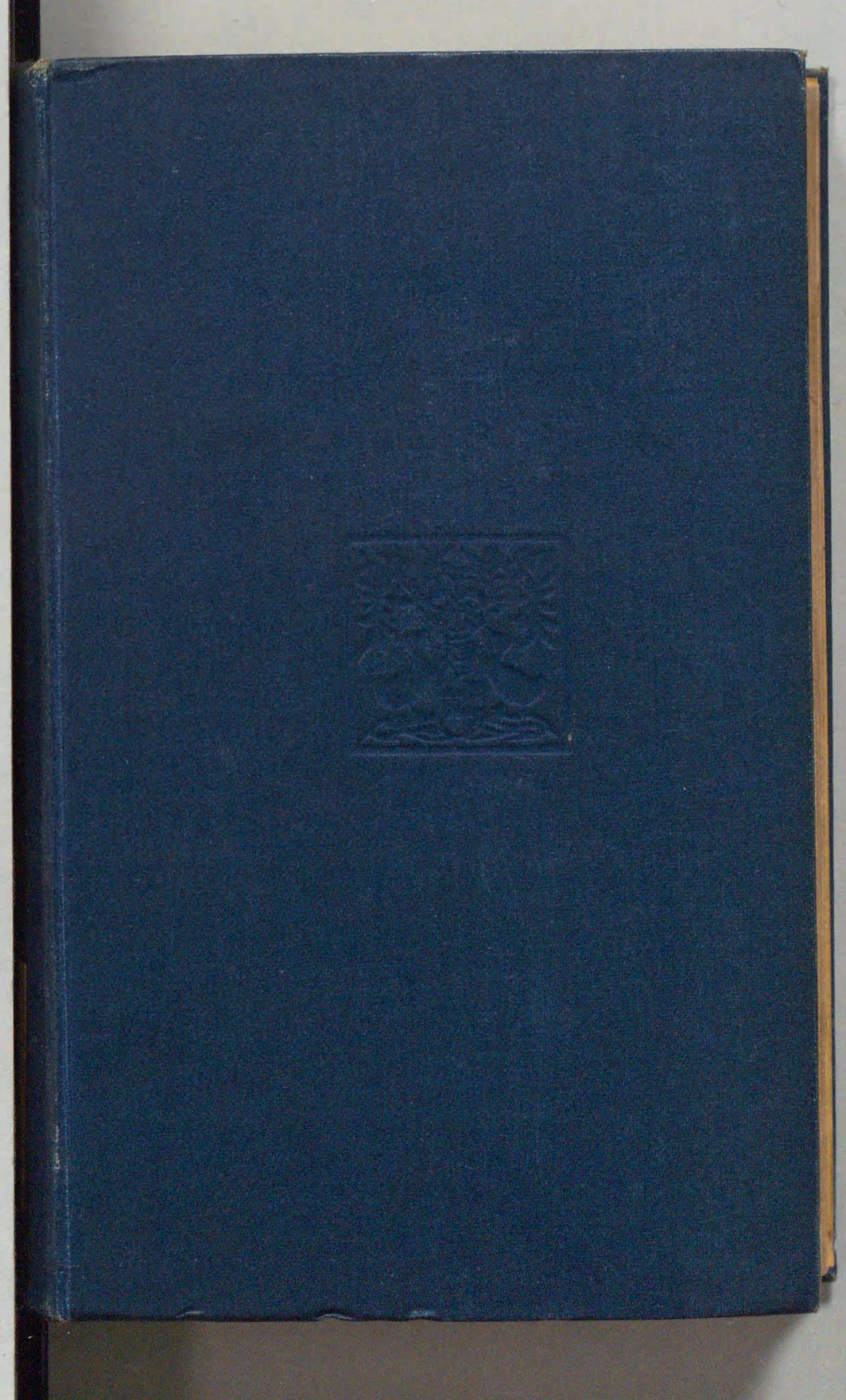
いて、「偖はありがた與一兵衛どのに候ふか。然樣とはしらずして、大いに無禮をまうしたり。萬望おん免しあれよ」とて、却て向の人より、只管にわび言し、忽ちに事濟み、たがひに別れんとしたる時、「ハツアありがたい」と云ひて去過ぎける。衆人大いに笑ひけり。這の老人文化年中七十餘歳にて、猶壯健なりしと、近松何がしものがたりき彼のありがたしの吉兵衛とよく相似たる老人にぞ有りける。

百家琦行傳　終

大正十一年九月十五日印刷
大正十一年九月十八日發行

有朋堂文庫
先哲像傳（非賣品）

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地　塚本哲三
印刷兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地　有朋堂印刷部
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

不許複製

780.